

絵カードを使ったコミュニケーション支援

— 「令和7年度実践報告会」の報告 —

本校訪問教育部

1 はじめに

刀根山支援学校では、毎年12月に事例をベースにした実践報告を行い、成果と課題を全教員で共有する機会を設けている。今年度は本校訪問教育部が主催し、担当する病院の紹介、児童生徒の疾患等の概要、ボバース記念病院での取組み、小4男子児童に対する絵カードを使ったコミュニケーション支援の事例報告を行った。事例報告では、ボバース記念病院より言語聴覚士の佐野麻子先生をお招きし、講評とアドバイスをいただいた。以下報告会について報告する。

2 概要

日 時	令和7年12月25日(木)
場 所	本校2階多目的ホール
講 師	社会医療法人大道会ボバース記念病院 リハビリテーション部 言語療法科 課長 佐野 麻子 様
対 象	当校教員
テーマ	絵カードを使ったコミュニケーション支援

3 本校訪問教育部について

本校教育部は大阪刀根山医療センターに隣接し、筋ジストロフィー及び類縁筋疾患のある児童生徒に教育を行っている。小学部、中学部、高等部を設置し、現在は筋ジストロフィー疾患の高等部男子生徒1名が在籍している。

訪問教育部は、院内学級が設置されていない病院や退院後自宅療養する小・中学生のところへ教員が訪問し授業を行っている。授業は週3回、1回2時間程度を基準としている。主に訪問している病院は、ボバース記念病院、国立循環器病研究センター病院、愛仁会リハビリテーション病院、大阪医科薬科大学病院、北野病院等である。

4 ボバース記念病院での取組み

今回の事例報告の対象児童が入院していたボバース記念病院には、脳卒中や脳性麻痺による運動障がいを持つ児童生徒がリハビリテーションのために入院している。重度知的障がいを併せ持つ児童生徒も多数在籍しており、授業は個別にベッドサイド等で自立活動を中心に行っている。個別学習だけでなく、集団活動「みんなの会」で、あいさつや出席確認、みんなで歌を歌う等、同年代のコミュニケーションの機会も設けている。また、ボッチャやボウリング、パラバルーン等、複数人で楽しく体を動かす活動も行っている。

5 本校訪問教育部の現状と課題、それを踏まえた取組み

本校訪問教育部に在籍する児童生徒の8割以上がボバース記念病院に入院しており、また全体の約半数以上が自立活動を中心に学習を行っている。先天性脳症のみならず、事故や病気により後天的に脳に障がいを負うことになった児童生徒も在籍しており、保護者の障がい受容への寄り添いや、復学支援に際して関係機関との連携等、担任の業務は多岐に

II 校内研修

渡る。また複数の病院への移動が伴うため、教員間の情報共有の時間が限られているのが現状である。

在籍する児童生徒の多くは発語が無く、自分の気持ちを言葉で表現することが難しい。また1カ月程度の短期入院の場合が多く、適切な支援のために短期間でアセスメントをする必要がある。こうした現状と課題を踏まえての取り組みについて、以下のように報告を行った。

(1) 医療教育連携シートの活用

令和6年度より、月1回のカンファレンスのみならず、随時連携シートを用いてリハビリテーション専門職の方に質問し、医療の視点からの見解を仰ぐことができるようになった。また授業を見ていただき、適切なアプローチ方法についても一緒に考えていただいている。

(2) スイガクの取組み

全教員が自立活動を担当することから、定期的に教員同士で自立活動に生かせる教材や活動を紹介したり、課題に対するアプローチ方法を考えたりするなど、教材研究を行っている。

(3) 事例検討会の実施

令和4年度より、夏季研修会にボバース記念病院のリハビリテーション専門職の方を講師としてお招きし、事例対象の児童生徒に対する教材作りや教材の活用方法について講評やアドバイスをいただいている。

(4) 訪問スタンダードの導入

令和6年度より、ボバース記念病院に入院する児童生徒を主な対象とする発達段階評価シート『訪問スタンダード』を作成・導入している。限られた時間で複数の授業担当教員が児童の実態を把握し、学習目標に応じた適切な支援ができるよう、シートを用いたアセスメントを行っている。

『訪問スタンダード』の作成にあたって作成委員会を立ち上げ、Sスケール、遠城寺式乳幼児発達検査、その他の文献などを参考に項目を精査したチェック表と、それぞれの発達段階における指導例の収集を合わせて行った。また、発達段階に応じてどのような指導が適しているかが一目で分かる表を作成し、さらに主に使用するボバース記念病院で実施できる内容に改良を加えていった。

『訪問スタンダード』の使用方法としては、授業開始から担当教員が一巡した段階で初期の評価と目標立てを行い、随時シートを更新しながら担当教員間で情報共有に活用する。また退院前に再度評価と引継ぎ事項を記入し、次回の在籍時に参考となるようにしている。

6 事例報告—絵カードを使ったコミュニケーション支援—

今回の事例を検討するにあたり、令和6年度夏季研修会に佐野先生をお招きし、絵カードを使った要求の表現方法や絵カードの製作について助言をいただいた。助言をもとに取り組んだ内容について、以下のように報告を行った。

事例報告では、はじめに対象児童の実態とコミュニケーションの課題、課題を達成するための手だてについて紹介した。対象児童は小4の男児で、前籍校では行きたい場所を2枚の絵カードから選択して伝える練習を行っていた。2枚とも行きたい場所ではないときには、カードを注視せず選択してしまうことから、その際の手だてを今回の課題とした。

手立てとしては、興味のないカードが2枚並んだときにNOカードを選択し、NOカードを選択した時はカードを1枚変更することとした。

次に取り組みの経過報告を行った。カードが取りやすいように、カード下部に取っ手を付けたこと、本児の特性を考慮し、2枚のカードを横並びではなく縦並びにしたこと、最

II 校内研修

初は NO カードが取れなかったが、その原因について分析し、コミュニケーションボードを工夫することで取れるようになったことを報告した。

最後に言語聴覚士の佐野先生より講評とアドバイスをいただいた。「まず、限られた時間の中で子どもの実態を捉え、細かくアセスメントができていた点が良かった。また、使用するカードをイラストではなく写真にした点も、1歳前後の発達段階である本児にとって有効であった。カードの選択において



は、四肢麻痺のある本児の視覚的な偏りや動止操作の難しさも考慮した上での工夫がなされていた。」と講評をいただいた。NO カードの選択においては、「YES/NO を理解し表出できることが大前提であり、本児はクリアしている。しかし、今回の課題は、NO=「いや」ではなく、NO=「違う（これじゃない）」の表出であり、その点に難しさを感じていた。NO カードを意図的に選択するには内的な概念の確立が前提条件であり、そのためには積み上げが必要となる。NO カードを選ぶ際に、「これじゃない」と意思を確認するなど、やり取りの中で少しずつ概念の形成を図っていくことが大切である。」とアドバイスをいただいた。

質疑応答では、「因果関係の理解を促すには、カード選択より視線入力等、ICT の活用が有効ではないか。」という質問に対し、「視線入力は自尊心を育み、また自立を促す上で有効であるため、本児が一人で楽しむことに活用すると良い。今回の取り組みにより、相手意識の低い本児が教員とカードを介したやり取りを通して「この人に渡したい」「この人に渡すと叶えてもらえる」という成功体験が得られたと感じている。こうした他者との適切な関わりにより、コミュニケーションの基礎となる三項関係が形成されていく。」と答えていただいた。

7 まとめ

本稿は令和7年度実践報告会での報告をまとめたものである。

講評の冒頭で佐野先生が「リハビリのスタートは評価である。」と仰っていたが、病弱教育においても児童生徒の適切な支援のためにアセスメントが重要となる。令和6年度導入の『訪問スタンダード』を活用した取組みを今後も継続していきたい。

また今回の実践において、佐野先生より医療の視点からの助言をいただいたことで、学習上の合理的配慮に繋がった。今回の実践のみならず、本校訪問教育部では児童生徒の退院前には助言をもとに取り組んだ内容について地域校へ引継ぎを行っている。当校が病院と地域校との架け橋となれるよう、今後も連携を図っていきたい。